

◎野木京子

今月も多彩で、味わい深い作品が多くありました。特に心に残った作品を以下に。

閉じかけた

朝顔の花の色の濃く

いつでも

死んだ人ばかり思う

桜望子

\* 一日しか咲かないアサガオの花。しぼんでしまった花ではなく「閉じかけた」花の色であるところが、此岸と彼岸の境界に引き寄せられる心の動きに見える。

ことばも人間も

こうまで残虐になれる

「十五円五十銭！」

門野あおい

\* 9月1日関東大震災の日の投稿作。日本人かどうかを選別するために、通行人に強制的に言わせた言葉だ。言葉は他者への恐ろしい武器でもある。

頭よりわずかに重い西瓜かな

長谷川柊香

\* 自分の頭を抱えて重さを量ったことのある人は現実世界にはいない。打ち首のイメージもあり、西瓜の赤い色が気味悪く思える。

植木市の地味な鉢植え

二つも買ってしもたと

祖母笑い

がま口の銀の鈴が鳴る

春町 美月

\*春町さんはよい詩を書き続けていますね。映像が見え、音も聞こえてくる。片隅のものに愛情を注いだ祖母のひととなりもよく出ている。

大人の中には子どもが入っている

その目が

あなたを見ている

板倉萌

\*大人のなかに子どもがいることは、永遠の少年などの表現でよく言われる。この詩では、自分のなかにいる子どもが、大人になった自分を見詰めているという入れ子構造となっていて、より複雑でおもしろかった。

まるで銀河棺の中の白菊は

亀山こうき

\*亀山さんは「白い菊母の匂いのしない母」という詩もあり、そちらもよかった。お母さまが亡くなられたのでしょうか。有限の箱である棺から、無限の宙へと、きらめきのように白菊が流れていく。

ビーカーに星の明りをためておく

細村 星一郎

\*この詩も亀山さんの詩と同じく、有限の物の中にある無限のイメージ。ビーカーとは、体の奥にある心の比喩で、その心には永遠の輝きへのあこがれがある。

レントゲンにも写るわたしの孤独                      宇井 麻千

\*自分のレントゲン写真を見ると、妙に心細く、孤独な気持ちになる。レントゲンには、人間という存在の本質が映っているのか。孤独なのは写真ではなく、写真を見詰めている自分の心のほうであり、その視線の動きもおもしろかった。

完全下校時刻を過ぎたら  
学校は消えて  
コンクリートのかたまりに変わる                      長野小夢

\*なるほど、と納得した。学校とは、建物のことではなく、そこに集う人間の体と心のぬくもりや、動きのことなのだ。無音で熱もないコンクリートの映像が目に浮かんだ。

芋煮会がしたい  
芋煮会がしたい  
でも芋煮会など  
誰も知らないし  
友達もいないし    加藤 美紀

\*加藤さんの詩は直截なところがあり、心を打つ。芋煮会という言葉は、私も昔、宮城県に引っ越した時に初めて知った。河原での芋煮会に参加したとき、料理だけでなく、秋の気配そのものも味わい、しみじみした。「芋煮会」の言葉が三回、「したい」「ないし」が二回繰り返され、大人の駄々っ子みたいな効果を生み、それゆえに淋しさが募った。